

とく  
徳

ほう  
朋

ききょうしき  
帰敬式からの生活

みしま たもん  
三島 多聞



みしま たもん  
1944—現在  
岐阜県生まれ。真宗大谷  
派真蓮寺住職。高山別院  
輪番。

真宗門徒にとって大切な仏事「帰敬式」。それは「釈〇〇」または「釈尼〇〇」という法名をいただく一つの儀式と言うだけで済まされるものではありません。私の人生をいただき直す肝心要であり、南無阿弥陀仏に沿って自分の人生を点検して見直していく大切な仏縁なのです。私の人生を虚しく果てるのか、それとも意味あるものとして生きるのか。その境目にある大切な仏事であり、決して人ごとではありません。

私たちは、生と死から離れることはできません。その中でも死は縁起でもない、遠ざけたいという思いがあるかと思えます。

レオナルド・ダ・ヴィンチが「生き方を学んでいるつもりだったが、死に方を学んでいたのだ」という言葉を残しています。逆に言えば「死に方を学ぶという事は、生き方を学ぶということである」。つまり死に方を学ぶことで、生きている事を問い直すことが出来るという事です。しかし私たちは、死は縁起でもないと思っていますから、死を考えたくない。学校でもいかに生きるのか、いかに勝つのかを主に考えていて、なかなか死のことにふれることはないでしょう。

今、幸せであればあるほど、死は私の今の幸せを根こそぎ奪っていくため、恐ろしいわけで

す。しかもいつ来るか分からない。今夜かもしれない。死を遠ざけるあり方は、このように恐れと不安に支えられたような生き方でしょう。果たしてそれでいいのでしょうか。私たちは死を避けるためにいろんなことを試すわけですが、キリストやお釈迦さまでも、孔子でも孟子でも、死を避けて通れませんでした。まして私たちが、死を避けて通れるわけがありません。

仏教、南無阿弥陀仏で人生を考えるとというのは、生と死をわけない、あえていえば死に立って生を考えるとということだと思ふのです。つまり、人間は死ぬものである、いのちは限りがあるものである、いつ死んでもおかしくないけれど、今、生きてある、と。生に立って見る時には、死を避けようとするしかありませんが、死に立って見る時には、今、生きてあることを有意義に生きようではないか、と真逆の考え方が芽生えるのではないのでしょうか。これは言い換えれば、南無阿弥陀仏の視点から、いま一度、人生を問いただし見直すということです。そういうご縁を帰敬式からいただくのです。ですから帰敬式を受けた人は、南無阿弥陀仏に立って人生を考えるように相努める。生きる事を、死に立って考える人生を始めるご縁をいただくのでしよう。いわゆる酔生夢死。人生が酔っ払って夢のうちに果てる、知らないうちに亡くなってしまったということにならないために、これから一緒に帰敬式から願われること、南無阿弥陀仏による人生の点検について尋ねていきたいと思ふます。

『人生の点検~帰敬式からの生活~』



この「徳朋」は仏教を拠り所としている方々の言葉に直に触れ、この身で感じる事を願いとして毎月作成しています。多少難しい表現もあるかと思ふますが、気にせず読んでみて下さい。

